

合理的ではない信仰の価値観 ヨハネ12:1～8 / 李正雨師

私たちが生きているこの世界は、合理性を追求しています。これは、多数の人の考えや理性に焦点が当てられていることとして、社会を構成して維持するためには、必ず必要なものだと思います。状況や環境によって、合理性ということには違いがあると思いますが、ほとんどの場合、普遍的に受け入れられ、社会で認められていることを合理的だと言っているのだから、合理性は私たちの社会で大きく認められています。このような合理的な考え方は、様々な学問に大きな影響を与えました。哲学と法学、倫理と道徳、論理と数学など、様々な学問に影響を与えました。教会もこのような合理的な考え方に影響を受け、近代に至って教会の根幹を占める神学も、合理的に変わってきました。しかし、教会の中での合理性は、明らかな限界を持っていました。なぜなら、教会の根本は合理的な考え方ではなく、信仰であったからです。

例えば、善を行う理由について考えてみましょう。社会でも、教会でも、善を行うことは、大切に思われています。しかし、その出発点はまったく異なります。社会で善を行うことは、共同体の平安と秩序、平等など、共同体のために行うことです。しかし、教会で善を行いなさいと教えているのは、善が神の属性であり、命令であるからです。それで、教会の倫理や道徳も人間の合意や経験ではなく、神様の言葉が基準となります。つまり、共同体よりは、神様がすべてのことに優先されるのです。これについて考えてみると、教会は合理的だとは思えません。神様の言葉とそれに従う私たちの信仰が教会の価値観を形成しているからです。そして今日の福音書は、このような価値観を私たちに示していると思います。

今日の福音書は、イエス様の友人であるラザロの家を背景にしています。ラザロの家はベタニアという場所にあり、そこはエルサレムに近い町でした。ヨハネによる福音書第11章18節にはこう書かれています。「ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。」ここでスタディオンは約180メートルくらいなので、15スタディオンは2.7キロメートルくらいになるでしょう。イエス様はエフライムという場所からベタニアのラザロの家に行かれましたが、これは過越しの祭りにエルサレムに行かれるためでした。当時、イエス様がエルサレムに行かれるのは、危険なことでした。イエス様がラザロをよみがえらせたことによって、祭司長たちとファリサイ派の人々のターゲットになっておられたからです。最高の権力を持っていた大祭司長も、イエス様を殺そうとしていたので、イエス様はラザロの家から離れ、エフライムという所に滞在しておられました。そして大祭司長と権力者たちは、イエス様がエルサレムに来ることを待っていました。今日の福音書の前であるヨハネによる福音書11章56-57節の言葉です。「彼らはイエスを捜し、神殿の境内で互いに言った。『どう思うか。あの人はこの祭りには来ないのだろうか。』祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスの居どころが分かれば届け出よと、命令を出していた。イエスを逮捕するためである。」イエス様はこのような状況にもかかわらずエルサレムに入ろうとなさいました。エルサレムに入ると、死がご自分を待っていることをイエス様が分からなかったわけではないでしょう。それにもかかわらず、イエス様はエルサレムに行かれることになり、行かれる前にラザロの家に立ち寄られました。今日の福音書1節の言葉です。「過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。」なぜイエス様は、エルサレムに行かれる前にラザロの家に寄られたのでしょうか。なぜそうなさったかは書いてありませんが、私の考えでは、イエス様がラザロに会う必要があったと思います。ラザロはイエス様が死者の中から生き返らせた人であったからです。

私も時々、自分の人生が大変に感じられる時があります。それで慰めを受けたいと思いますが、慰めを受ける所が実は多くありません。御言葉や祈りで解決するのが一番良いと思いますが、それが上手くいかないこともあります。そのような時、私は、私の子供たちの写真とか寝ている姿をしばらく見ます。そうすれば、不思議なことに新しい元気が湧いてきます。私のことを信じている子供たちがいるということ、私が守らな

ければならない家族がいるということが、私に大きな力を与えてくれます。イエス様がエルサレムに行かれる前に、ラザロの家に寄ったことも、これと似ているのではないかと思います。ご自分の死の前に起きるいろいろなことに勝ち抜く力が必要だったのではないのでしょうか。ラザロの復活がイエス様の死に強い力を与えてくれるからです。

イエス様がラザロの家に着かれると、イエス様のための食事が用意されました。この食事は、普段の食事とは違っただろうと思います。なぜなら、イエス様がラザロを生き返らせたからです。2節を見ると、マルタは給仕をして、ラザロはイエス様と共に食事の席に着いたと書かれています。それぞれ自分のやり方でイエス様を迎えたのでしょう。そして3節には、今日の福音書で話題になることが起こります。3節の言葉です。「そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。」ユダヤ人の社会で足をぬぐうのは、特別なことではありません。家に入る前や食事をする前に足をぬぐいますが、そのことは主に僕たちがすることです。主人が足をぬぐうことは珍しいことであり、特に女性が足をぬぐうことは、より珍しいことです。ところで、今日の福音書でのマリアは、そのようなことをします。それも水ではなく高価な香油で、手ではなく自分の髪でイエス様の足をぬぐいます。このことはその場に一緒にいた人々を驚かせたことであり、特にイスカリオテのユダの気に触りました。イスカリオテのユダはこう言います。「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか(5節)。」

今日の福音書は、イスカリオテのユダが貧しい人々のことを心に掛けていたからではないと語ります。彼が金入れを預かっていたので、盗むためにこのように言ったそうです。これは、イスカリオテのユダの本音だったと思いますが、ユダが貧しい人々のためにイエス共同体のお金を施したことも事実です。ヨハネによる福音書13章29節にはこう書かれています。「ある者は、ユダが金入れを預かっていたので、『祭りに必要な物を買いなさい』とか、貧しい人に何か施すようにと、イエスが言われたのだと思っていた。」イスカリオテのユダは弟子たちの中で会計を担当していて、自分の仕事の一つは貧しい人に施すことでした。それで彼は、マリアの行動に敏感に反応したのだと思います。自分の下心もあったと思いますが、その香油が多くの人々を助けられるほどの価値もあったからです。ちなみに300デナリオンというのは、労働者1年分の給料だったそうです。数百万円の値をつける香油だったのです。

このようなイスカリオテのユダの反応は、社会の福祉や救済の視点から見ると、そんなに間違っていることではないと思います。香油を高く売って貧しい人々を救済することの方が、一度だけ使用することよりも、はるかに価値があるからです。そして善を行う観点から見ても、施すことはかなりもっともらしく見えます。しかしイエス様は、マリアのこの行動はご自分の葬りの日のためのものだと言われます。ルカによる福音書23章56～57節には、婦人たちが墓とイエス様の遺体が納められている有様とを見届け、家に帰って、香料と香油を準備したと書かれています。これを見ると、イエス様の葬儀は香油なしに行われたということが分かります。そしてこのために、神様はマリアを通して香油を準備なさったのです。マリアがこれらのことが分かっていたかは分かりません。このようなことを行ったのは、自分の兄弟を生き返らせたイエス様に対する感謝だったかもしれません。しかし、これらのすべてのことは神様のご計画であり、私たちはこれを信仰の目から見ます。だから、イスカリオテのユダの言葉が合理的に見えるかもしれませんが、それが私たちの信仰による価値ではありません。私たちには数百万円の善よりは、イエス様の死と復活がより価値があるからです。

信仰の価値は合理的なものではありません。形而上学的なものであり、私たちが分からないものです。それで、イエス様の死が私たちにとって価値があるものであり、私たちができるすべての善よりも優れたことなのです。そして、神様は私たちが分からないこの信仰を通して、私たちを救われました。ですから、私たち信仰の者たちは、神様の御言葉が合理的か合理的ではないかを問わずに神様に従っているのです。神様が私たちに信仰の価値を悟らせてくださいますように。私たちにイスカリオテのユダではなく、マリアの心を与えてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン